

医療が求める放射線技師

(平成14年3月31日受付)

元(社)神奈川県放射線技師会副会長

元神奈川県大和市立病院 放射線科長 小林輝雄

はじめに

この表題の原稿依頼を受けたとき、過去の投稿発表原稿の中から「放射線技師の職業発展のために、今、何をすべきか」(日本赤十字放射線技師会会誌, vol. 41/2000.)というテーマの投稿が、思い浮かんだ。

残念ながら、日常的に医療事故が新聞・テレビ等で大きく報道されているのを知るとき、人が人に対して行う医療が、医療の提供者である人の資質に大きく関与していることを知らされる。医療の現場で働く人は、多くの専門職の集団である。専門家は自分の専門領域を侵されたくないという傾向がある。それが相互作用して業務間連携の支障となり、医療事故発生の要因となる。事故が起きれば結果として人的ミス、それも自らの医療人としての職業意識の欠如が世に公表されることになる。

最初に、この表題の結論として診療放射線技師に「医療の現場では、specialist(特殊技能者)である前に、医療提供の専門家(professional)であること」を求めていると答える。本稿ではその理由を、科学・技術優先の教育・研修・指導から、医療技術者としての人格形成の必要性を述べることにする。

私の好きな言葉に『昨日は経験であり、明日は希望である。そして今日は、昨日から明日へ最善の移行をすべき日である』というのがあり人生訓としている。40年の医療現場の体験、24年の技師会役員を経験を昨日、退職後に医療を第三者(日本医療機能評価機構・調査員)の目で見る機会を得ることができたのを今日として、明日のためにそこで見聞したこと等を表題に沿って自由な発案者として記述する。私の原稿の進めかたは、本を読んだり、講演会で話を聞いたりした体験から、難しい理論を中心とした本や話の30%を理解するよりも、わかりやすいものを80%吸収する方がプラスになると一途に思い込んでいるので、文章が長くなってしまふ。読まれる方には自由な情報の取捨選択権がある。多くの活字の中から説明の足りないところを自分の考えで補っていただき、1行でも2行でも納得できる事柄を見いだして、少しでも役立つ

ていただければ幸いである。

医療環境

患者さんの求める、期待する良質の医療を提供するために、提供者と対象者がどのような環境のもとで生活しているのか知ることは、放射線技師業務を組み立てる原点と言っても過言では無いと思うので貴重な紙面をお借りして復習したい。世の中には仕組みと中身があって人が居ると言われる。医療の仕組みとは、医学の社会的適応のことで基礎医学、臨床医学、予防医学などの学問をその時代の社会に適合するような国の政策を基にして法律を制定し、効果的な医療を提供して国民を疾病から守り、豊かな社会生活を営むことができるようにすることである。言い換えると、『医学+政策+法律=医療』ということになる。従って医学の進歩は医療を変え、政策の転換は法律を改廃制定し、医療の中身を変えることになる。国の政策を考えると国家財政を無視することはできない。増え続ける赤字国債の発行と失業率は国民に「あきらめ」を浸透させつつある。医療政策は、医療費削減・保険制度の改悪など医療現場には一筋の明りすら届かない。介護保険制度も医療の現場に少なからず影響を及ぼしている。このような仕組みの中でもますます高まる国民の健康願望に応えるのが医療従事者である。医療の中身とは、提供の内容・水準・患者の満足度などで、医療従事者は厳しい外的環境を念頭において、患者さんの強い要望である信頼できる医療技術と人間的な温かみ・思いやりを、仕組みの中で達成し得る最高の医療として提供しなければならない。中身を評価するのは勿論患者さんである。

仕組みは、病院という組織、放射線科という部署にも存在する。病院の仕組みとは、各県で制定された地域医療計画に基づいて、地域の医療需要にどのように関わり、貢献できるかを組み立てたものであり、院内各部署の仕組みとは、病院の基本方針・目的を達成するため円滑に効率的に業務が遂行できるシステムである。病院の医療機能評価は、その病院の目的・理念を医療従事者がどれだけ理解し、他職種と協調して、患者さんの満足する安定した医療を継続して提供できるかという仕組みと実践、その結果がどの程度改善に向けて企画・実行されているかが重視されていると言える。

免許を持つということ

職業の発展を望むときには、その職業の誕生した経緯を思い起こさなければならない。そこでもう一項、復習の時間をいただきたい。医療が始められた頃は、医師对患者という極めて単純な形式で診療が行われていたが、患者の増加に対応するために診療の介助と療養の世話をする看護婦が必要となり、薬の専門家として薬剤師が制度化されるというように、医療の発展と

共に多くの専門細分化された医療技術者が誕生している。放射線の医学への利用は、1895年レントゲン教授によってX線が発見された翌年に撮影や治療が行われている。当初はX線の本質を見極めるよりも利用が先走り多くの放射線による障害が報告されている。わが国では1945年に広島と長崎に原子爆弾が投下された恐怖が、放射線という言葉で国民が敏感にこれを避けたいという反応を示すようになってしまった。医療への放射線の利用によって、病気の早期発見や治療が可能になり、健康で豊かな社会生活を営むことができるという利益の反面、障害の起こる可能性も否定できない。医療の現場で患者さんが放射線を恐れるあまり、放射線検査を拒否するようになったら医療は混乱してしまう。そのような背景から放射線の取扱には十分な注意が必要という認識のもとに、専門教育を受けた後、国家試験に合格した者に診療エックス線技師の免許を与えるという仕組みで1951年に法律が制定され、その後医療の中に放射性同位元素の利用が急速に進み、安全利用の専門技術者として1968年に先の法律の一部が改正されて診療放射線技師が誕生した。身分法の制定は、免許により利益を得る所持者のためではなく、免許所持者の行動によって国民の生活の安全が守られることにある。従って業務の基本は、医療の中の放射線取扱い専門技術者として関連する一連の業務に『安全配慮義務』を怠らないということになる。安全配慮義務には、自分の行う業務により、どのような危険が発生する可能性があるかを考える「危険結果予見義務」と、考えられる危険を避ける「危険防止回避義務」があり、この義務を果たすことに忠実であるかどうか、技師の業務遂行の評価をする上で重要となる。同一の免許所持者は業務上、新人もベテランも同じ責任が生じるので、複数の技師の働く組織では、技師の能力による適材適所の配置、業務遂行上の必要な教育は技師長の責任となる。

ここで述べた「危険結果予見義務」と「危険防止回避義務」が、リスクマネジメント（危機管理・事故防止）の基本である。

医療従事者に求められる基本的条件

以前、高校生の進路指導の参考書として「診療放射線技師への道しるべ」発刊の話があり、原稿を書いたことがある。その中から一つの項目を紹介したい。この基本的条件は、入学前に備えているのが望ましく、不足している所は在学中に埋めなければならない事項である。医療の現場ではハード面である専門技術より、人間性というソフト面が重視されるのは言うまでもない。(以下、当時の原稿のまま記載)

◎ 医療従事者に求められる基本的条件

医療の現場で働く者は、優秀な技術者である前に心豊かな人間性をもたなければなりません。心豊かな人間性というのは医療の場だけではなく、社会人としてもより良い人間関係を保つた

めにも大切なことです。次に掲げる事柄は、最初から身に備わっているものではなく、学ぶこと、経験することによって、心に蓄えられ必要なときにいつでも取り出せるようになります。

1) 患者さんの悩み、苦しみがわかる

患者さんは、痛み、苦しみ、悩みをもって医療機関にやってきました。患者さんのからだの痛みをとるだけでなく心の痛みをとり、心を支えるということも大切な仕事になります。

2) さまざまな変化に対応できる

患者さんの環境（職業や収入、家族構成、年齢、性別、学歴など）は千差万別です。そして変わりやすい患者さんの感情に、いつでも患者さんの気持ちになってやさしく対応できる心をもつことが大切です。

3) 自分の感情をコントロールできる

医療従事者も人間ですから、物事に触れて生じる喜怒哀楽があります。対人関係が最も大切な医療の現場で、感情の対立が生じたら大変なことになってしまいます。いつでも理性で対応できる人が求められます。

4) さりげない思いやり、気配りができる

病状が悪くなると家族、付き添いの人も動揺します。医療機関を訪れる人、すべてに同じことの繰り返しであっても手抜きすることなく、誠実に対応できる人が望まれます。

5) いつも笑顔で対応できる

接遇という言葉には「もてなし」と「あしらい」という諸刃の意味があります。突然、医療界という別世界に飛び込んだ患者さんにやさしく励ましの言葉をかけながら、仕事を進めます。自分自身の心に余裕がないと、気配りも、相手を受け入れることもできません。

6) 縁の下の力持ちに徹することができる

診療放射線技師の業務は、自分の意思で直接患者さんを診察治療することではありません。医療は多くの職種が集まって、患者さん中心に行われます。チームの一員である自覚を失うとチームメイトに迷惑をかけるし、一番困るのは患者さんです。

7) 礼儀正しく、清潔感がある

患者さんは、医療従事者に自分の命を預けます。病状が悪化し意識が無くなった患者さんにも声をかけ、手を添えることで人間性を確認しなければなりません。

8) 患者さんの秘密が守れる

病院は、人間が生まれ、病み、死ぬところで人生のドラマの場面が数多く見られます。当然、業務上、患者さんのプライバシーを知ることが多くあります。秘密が漏れるのは、他人に話すことだけでなく検査結果の置きっ放しや私語にも細心の注意が必要です。

9) 自律、協調ができる

現代は高度なチーム医療が求められます。他の職種の人との連携、特にそれぞれの業務の谷間を埋める業務の相互乗り入れという協調性が不可欠です。これを可能にするのは、自分の行動や言動を規制する自律です。

10) 判断力があり冷静である

患者さんを前にして、今、「自分は、患者さんのために何ができ、何をしなければならないか」を冷静に的確に判断し、即実行できる資質が求められます。一つ一つの経験の積み重ねにより豊かな判断力が身につくようになります。

11) 聞き上手であること

よく聴くという態度は、望ましい人間関係をつくります。患者さんは話を聞いてもらいたいという気持ちでいっぱいです。時間の許す限りよく聞き、言葉の奥に隠された気持ちを知ることが大切です。

12) 常に向上心があり自己研鑽に励む

科学技術の進歩は休みなく医療の現場へはいつてきますので生涯、学び続けられるという気持ちを自分で確認することが医療職選択の第一条件です。現場での対応の仕方は現場で学ぶものです。毎日の体験は最高の知識、財産となります。

この12項からもわかるように、いつも念頭におかなければならないことは診療放射線技師の業務の対象者は人間であるということです。しかもその人は病に苦しみ不安をもっている人達です。(以下略)

放射線技師の役割実践

表題の「医療が求める放射線技師」に、私は自分の経験を集約してもう一つの答えとして『自分は、患者さんのために何ができ、何をしなければならないか、何をしたらいけないのかを考えて行動できる技師』と答える。

診療放射線技師に求められることは、1951年身分法制定時は「国家試験受験時の医療水準に対応できる技術をもって、医師の指示のもとに、エックス線を用いて患者を検査撮影する」ことであったが、今は『地域の医療事情を熟知し、自院の保有する診療機能を活用して、医療チームを構成する他の職員と協調し、患者さんの利益のために、診療放射線技師として役割を実践する』ということができる。病院の設置目的、規模、診療機能などにより異なる病院の持つ役割に、自分の役割を近付ける、そして重ねるのが望ましい。私は役割実践のために必要な3要素は「研修・協調・接遇」と話し書き続けている。

研修は、専門技術者として必須のものであることは技師本人も十分に理解しているが、医療提供の職業人として協調性・接遇については残念ながら取組が積極的であるとは言えない。協

調性・接遇という基礎的な人格形成の上に、技術を積み重ねるとというのが理想であり現実に即応するというのが持論である。

(1) 技術水準の維持 — (研修)

診療放射線技師の免許を与えられた者は、その法の趣旨により『人体に有害な放射線を診療のために用いる専門技術者として、放射線、医学等に関する知識、技能の水準を一定以上に確保することによって医療及び公衆衛生の普及、向上に寄与する』これが第一の役割である。急速な進歩、発展を続ける技術革新は、更にその利用により新しい技術を生み出し、医療の現場に進出してくる。医療の仕組みの変化等まで加味すると、免許取得時から何も学ばなかったら、必要な知識はコバルトの半減期と同じ位かも知れない。

免許取得後、私的な調査では研修のため48人中3年間で38日費やした人と2日の人が居た。計画的な自己研修のために年6日位の職業維持日と職業維持費として給料の2～3%の確保は必要と受け止めたい。研修内容は技師だからと技術面に偏りがちであるが、業務面では職務規定についての教育、医療関連規則等の教育、院内感染防止についての教育、経営的側面についての教育、さらに職業倫理については患者の権利についての教育、患者のプライバシー尊重についての教育、医療事故防止のための教育、患者から金品の謝礼を受け取らない教育、患者に対する接遇についての教育を受けることも必須である。これらは医療の現場へ入る前に、医療従事者に求められる基本的条件として基礎的教育を受けているというのが現場の期待であり、病院の役割・機能に応じた研修は病院で企画する姿勢を持っている。

(2) 信頼される医療人 — (協調)

『チーム医療では、医療技術者間の連帯と協調が成立してこそ、近代医療に必要な情報の交換、技術の開発が可能であり、それを患者さんの利益になる方向で利用する』ことが医療の場で働く者の使命であり、診療放射線技師としての第二の役割と考える。

専門家は、とかく専門家過ぎると融通性がない、協調性を欠くことが多いと言われる。医療技術者間の相互の指示、伝達に意志の疎通を欠くと責任の所在があいまいになり、医療事故や医事紛争の起こる背景となり、患者さんに医療不信が生まれてしまう。

「事業は人なり」と言われるのは医療の中でも同じことで、チーム医療の中でそれぞれの役割を果たすのも、患者さんの苦痛を和らげるのも、立派な機器を動かすのも人間である。放射線技師はというより、総ての医療従事者は患者さんとチームリーダーである医師の信頼が得られなければ、医療効果の向上に役立つ仕事をしているとの満足感は得られない。自分にとって毎日の基本的な業務は同じことの繰り返しであるが、患者さんにとっては初めてであり、提供者として初心を忘れず、少しの手抜きも許されない。技師によって、日常の業務の進めかたに戸惑いを感じる患者さんがいる。同じ検査でも、施設間で脱衣等基本的なことで前回と異なる

指示があるとそのせいで結果が悪かったのではとってしまう。基本的な業務マニュアルの確立は、その病院で受診すれば誰が検査を担当しても同じ結果、同じ評価が得られるものでなければならない。稀にある業務は彼が担当、彼に任せてあるということでマニュアルを持たない施設があるが、組織として引き受ける以上は誰でも同じことができるものが必要である。

(3) 患者さん中心の医療 — (接遇)

役割で最も大事なことは技師の人間性が問われる患者さんとの接遇、つまりパーシェントケアである。そこで第三の役割は『診療放射線技師として、自分が持っている知識をどのくらい患者さんの立場になって知恵として生かし、行動しているかを常に自己評価、反省し、その経験を次の業務につなげる心を持ち続けること』と言える。

診療放射線技師の業務の対象は、病気に悩み、苦しみ、痛みを持つ人であって健常者ではない。接遇という言葉には「もてなし、接待」という歓迎を表す意味と全く反対の「あしらい」つまり、いい加減に扱うということも含まれているので、接遇というのは当事者の心がどちらに多く比重をかけるかにより決まる。接遇の評価は患者さんがするものであり、良くやって当たり前、患者さんの我がままからであっても意に添わなければ冷たい人という評価が下されてしまう。評価されるポイントは次の3つに分けられる。

まず行動。自分の業務に自信をもって、ときばきと患者さんに指示を与え、迅速に業務を進めるのが信頼を得る第一の条件であり、事務的であってはならない。患者さんを安心させる微笑みを忘れないように、いつも一声かけて、患者さんは自分の母であり我が子であるという気持ちで接し行動することである。次に言葉。インフォームドコンセントを円滑に行うために、患者さんの話を良く聞くこと、話し易い雰囲気をつくるのが大切で、対話はわかりやすく、思いやりのある言葉で優しく語りかけることが基本。相手が聞いてくれる筈だ、聞いてくれるもんだという一方的な話し方には威圧が感じられてしまう。患者さんの良い相談相手として、年齢や性別、そして職業など生活環境を十分考慮した話し方をするのが大切で、患者さんに十分通じる話し方ができなければ役に立つ対話とは言えない。最後は服装。これは患者さんの眼に直接映るものであるから、清潔で活動的なものを選ぶ。頭髪、爪、履き物等、さらに患者さんを抱き抱えることも多いので角のある堅い名札の着用にも配慮することも当然である。

医療の場の接遇、看病の原典を求めたとき仏教に、幸福の種を蒔く『福田思想』があるのを知った。それは医師と看病人と病人が一体となった時、はじめて病気は治るというもので看病の四分律として、①病人のためになる食べ物と、ためにならない食べ物を良く知り、食べさせること、②病人の大便、小便それに唾や吐いた物を汚いと思うな、それが病気を知らせてくれる、③慈愛の心をもって接するべきで、自分の贅沢な生活のためにするな、奉仕の心をもて、④病人に生きている喜びを抱かせることが大切。このことから「病気は、患者さんの身体が治

すもので、身体が病気を治す努力をするのに大きな影響を与えるのは、患者さんのそばにいる人」と理解できた。

組織と人

病院は、病院がその地域の医療需要を円滑に解決するために、自分たちの役割分担を明確にして地域医療に貢献することを目的に仕組みが組み立てられる。組み立てるとき、さまざまな問題が持ち上がり、それが相互に関連し次の問題が派生する。この多くの問題を解決するために作られたのが組織である。従ってその組織で働く人は、いろいろな問題の解決者でなければならないが、職員間で問題を発生させていたのでは組織は破壊してしまう。病院の仕組みを考えるのも、その仕組みの中で最高の中身を提供するのもその組織、つまり病院で働く人である。故に組織の評価は職員により決まる、優秀な人がいるか、いないかで全く違った結果が生まれるといわれる。

診療放射線部門という部署も、病院の目的を円滑に遂行するために作られた一つの組織である。多くの人が働く大病院の放射線部門も、一人配置の部署にも運営の仕組みがある。その仕組みの中で派生するさまざまな問題の解決責任者として技師長の責任は重い。いつも一人配置で技師長はおかしいという言葉が聞かれるが、職位は人のためにあるのではなく、病院の業務遂行上必要な組織のために置かれるものというのが私の持論である。技師長の業務内容は、大規模施設と小規模施設では異なるが、基本的なその病院の目的に応じて放射線を用いて診療情報を提供するさまざまな問題の解決を図る責任者は、明確にしておかなければならない。最近、多くの現場で職位の役割を認識していない技師の多いことに驚かされる。年功序列で上がるからという意識が強く、その時が来たらやると言う。私見を述べると、中規模以上の部門の技師それぞれの役割は、新人は、自分に割り当てられた、指示された仕事ができること。2～3年の経験者は、所属に割り当てられた仕事ができ、自分の仕事について改善ができること。主任は、所属の仕事について提案ができ、部下の指導ができること。主査になったら、部下に仕事の割り当てができ、所属の業務について改善できること。補佐は、所属内の業務について調整でき、所属の運営について改善・提案できること。技師長は、所属業務について管理運営ができ、病院運営について提案できることが必須と思う。勿論、個々の業務について技師長への承認・報告を怠ってはならない。自分の職位の一段上の仕事ができないと組織は停滞し、いつも上司に補佐されるようでは組織は退化する。組織人としての評価を大別すると、暗示(suggestion)を与えると目的を理解し実行できる人、助言(advice)をすれば業務を遂行できる人、手助け(assist)がなければ仕事ができない人となり、いつまでも手助けが必要なら、代わりは居ると言われてしまう。病院医療機能評価は個々の職員の評価の積み重ねの結果と言っても

過言ではない。

どんな職業に就こうと、成長に向かう第一歩はその職業に興味をもち、好きになることである。仕事が好きになれば、自分に不足していることを学ばなければならない。その努力が良い評価となり職業の発展に繋がる。

業務評価と自己評価

患者さんの求める医療に、応える医療の提供をしているか。それを評価するのは、患者さんであり、提供者である関与した医療従事者と本人の自己評価である。いずれの場合も、患者さんの満足度が基本になる。私が日本放射線技師会雑誌 537号に投稿した『放射線技師の役割・実践のための自己評価』の結果は、表題のもつ性質から多くのデータは得られなかったが、現状を垣間見ることができる。発表直後の48名のデータで平均点が5段階評価の低かった項目は、2に近い1点台が、一連の業務について原価管理ができる、関連法規に精通している、地域の医療事情に精通しているの3項で回答者の6割以上が1点の自己評価をしているのに驚かされた。2に近い2点台が、学術大会に出席できない時は必ず抄録集を読む、国家試験に関心を持ち自己採点している、月刊専門誌を継続的に購読している、他所属の業務について患者さんに答えられるという項目であった。さらに同じ評価票を用いて他人が評価したらどうという結果になるのかを得るのは大変なことで、8名の勤務する病院の院長先生に趣旨を説明し協力を得た結果では、合計点で自己評価 2,883点・他人評価 2,674点、平均点で自己評価 360点が他人が評価すると 334点で26点の差が生じる。2以下の評点は自己評価で 8、他人の評価で22あった。この差を私は、同僚が「彼ならもっと出来る筈だ、やって欲しい」という期待をもった気持ちを強く持っているからと分析している。

診療放射線技師職の発展を望むなら、期待どおりにやり遂げる責任がある。それが社会での役割であり、やり遂げる心構えがどの程度あるかにかかる。個人の性格は変えにくいと言われるが、それは個人の意識によると思う。

個人の性格・パーソナリティ(personality)の語源は、ラテン語のペルソナ(persona—仮面)に由来し、それは劇などで使われる仮面を意味している。最初は劇の中で俳優が演じている役割を指していたが、そのうちその役割を演じている人自身を指すようになり、その後、ある役割を持つ人物の行動の特徴を意味するようになったと言われる。人間が生れ、病み、死ぬという喜怒哀楽の人生の舞台として、テレビドラマが病院で働く職員を写し出すのを見て、本職よりも「らしく」演じている俳優の努力に自分を重ね、反省することも反面教師にすることもある。性格は、生れもった遺伝に、親の性格・育児態度などの家庭環境、地理的な自然環境や社会環境、そして多くの部分は学ぶという教育によって形成される。役割を果たすために必要な教育・

研修を怠ってはならない。

役割を果たすために、そして職業の発展に不可欠なことは倫理の高揚である。倫理とは、人間としてふみ行うべき道であり、それは他から強制されるのではなく、個人の内面的な努力により形成、実践されるものであるから、倫理は人格形成の核と言える。

人間の内面に積み上げられた良心の掟というのが倫理、道徳と言われるもので、外面に設けられた社会の約束事が規則、法律である。倫理は不変であるが規則・法律は都合により変えることができる。社会生活の利害関係を倫理で守るか、規則で縛るかというとき、お互いに善に向けて満足をめざして自己規制するのが倫理であり、自分のことばかり考えて、他人のことを考えないで行動すると、規則・法律で罰するという恐怖をもたせる規制が行われ窮屈な社会・職場になってしまう。社会人として秩序を守るには、社会・職場の約束事であるルール(規則・法律)を知り、認め、ルールを守るためにマナー(礼儀・作法)を身につけるというモラル(道徳)の実践が大切である。

知・行・果の一致

いつも原稿の最後を書く言葉として『知・行・果の一致』がある。これは東芝を再建し、行財政改革に情熱をかけた土光敏夫さんの言葉で、『知』=知っていても、行わないのは、知らないのと同じこと、『行』=行っても、成果が出ないのは、行わないのと同じこと、『果』=成果が上がらないのは、取組が悪く、知識が不足しているから。

現代は大勢の中の一人の不注意が組織全体の不信をかう時代であり、個々の職員の能力が評価される。何故なら組織の成果は、そこで働く人の能力以上には上がらないから。

これまで述べたことは、読まれた方にとって先刻承知というものばかりと思う。既に知識として本文以上の原稿を書くことが出来ると思う。しかし見聞した多くは、結果が伴っていないという残念な現実がある。自分の職業に誇りを持つこと、子供に自分の職業を薦めたいという気持ちが職業の発展につながるというのが持論であり、その為にならなければならないこと、考えなければならないことを記述した。

(2002.3.10脱稿)